The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	越境と文化
Author(s)	杉原, 達
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集①
越境と文化

杉　原　　達

本特集は、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室が、「日本学方法論の会」として毎年開催しているシンポジウムの成果を整理し報告するために編集されたものである。まずその経緯について述べておきたい。

2013年度のシンポジウムは「越境と文化」というテーマで企画された。会は、2013年７月３日（水）午後２時40分から午後６時30分まで、大阪大学豊中キャンパス内の待兼山会館２階会議室において、約30人の参加を得て開催された。まず私から問題提起を行い、それをふまえて冨永悠介、鄭卉芸、上地美和の３人が報告した。続いてコメンテーターとして廣岡浄進、林葉子、平田由美の３人が、それぞれまとまった時間をとってコメントをおこなった後、討論に移った。

今回の「日本学方法論の会」の本番に向けては、５月16日と６月５日に、関係者のほぼ全員が参加し、院生の積極的な参加も得て２回にわたって準備会を重ねた。その意味では、７月３日の会は、助走を伴った一連の研究会の集約の場であったと言えよう。

これまで「日本学方法論の会」は、特定のテーマを設定して外部から複数の専門的研究者を招き、研究室内外の若手研究者と共に報告・討論することによって議論を深めるという形式をとることが多かった。その場合、いわばぶっつけ本番に近い状況であることを参加者各位が理解しているが故に、当日にかける集中力は高く、引き締まった討議空間が形成される可能性が高いというメリットもある。他方で、多忙な外部研究者の日程を調整することは容易ではなく、ある程度の事前連絡はできても十分な打ち合わせは難しい。また会が終了すると、関係者の間で論点の深化をさらにめざすことはますます困難となってしまう。

こうした従来のスタイルとは異なり、今回は、日本学研究室の院生を対象とした授業である日本学方法論演習（報告者は事前にディスカッション・ペーパーを限定公開し、参加者はその内容を前提とするため、演習はほぼ冒頭から実質的な討論の場となる）の拡大版として位置づけることを当初から企図した。報告者、コメンテーターはすべてこの演習の進め方を理解しているメンバーである。予想通り、あわせて３回の研究会では、ペーパーを前提にした上で、観点、方法、史料、聞き取り等をめぐる議論が繰り返し提起され、論点は分岐し、報告者には課題が次々に付加されていくという厳しい状況も生まれた。また

コメンテーターからは準備会と本番の会およびその前後の時期を通じて、各種の史料や参考文献、考慮すべき分析視角などが提示され、当日の会を頂点としつつも、一連の討議過程を通じて問題を共に考える試みが継続的に追求されたことを記しておきたい。この点に関連してさらに一言しておこう。本特集に掲載された３人の論文タイトルは、「日本学方法論の会」当日の報告題目といずれも同一ではない。また内容も発表時のものとは変更されている。それは今述べたように、議論の継続の中で、改めてテーマを限定したり設定し直したためであり、またそれにあわせて資料を吟味し内容を再表現しようとしたためである。（なお３人の方々からのコメントは、いずれも７月３日の会での３報告に対してのものであることをお断りしたい）。

以上が本特集の成立の経緯である。このたび上記の計６人の方々から、2013年７月当時の報告を基にしながらその後の考察も加え、また臨場感にも配慮しつつ加筆修正をした論稿を寄せていただくことができた。シンポジウム担当者として、心より感謝したい。

*

本稿は、シンポジウムの冒頭に行なった私の発言の骨子を基礎にしながら、時間の関係で省いたことや当日の議論およびその後の関係者各位とのやりとりから考えたことなどをふまえて改めて問題意識を記述し、本特集の前言とするものである。

「日本学方法論の会」としてのシンポジウム開催は当研究室の毎年定例の活動であると記したが、私自身が特集担当者となったのは３度目のことである。そこでまず本テーマの継続性について述べておきたい。

私が担当した１回目は「越境の中の近現代日本」（2002年６月開催）、２回目は「いま、指紋押捺を再考する」（2009年７月開催）であり、それぞれ『日本学報』第22号（2003年）および第29号（2010年）に特集が掲載されているので、参照していただければ幸いである。

１回目の開催にあたって、「「越境」という表現に、私は、さまざまな形できびしく存在する境界をしっかりと見定めるとともに、そうした境界そのものを揺さぶるような契機を動態的にとらえ、それを積極的に創り出してゆきたいという思いを込めている」[1)]と述べた。また越境を人の移動と等値しがちな考え方に距離を置き、「同時代的・世界的連関の中で権力と学知が越境するという事実をしっかりと見据えた上で、それが個々の人びとのくらしを規定するとともに、その拘束をずらし揺さぶるような動きに注目する視座を確立しようとするという姿勢」[2)]をとることの意義について言及した。そうした基本的観点のもとで、近現代日本をめぐる越境のありかたを、そしてまた「日本」という規定性を根底的に問う報告と討論が行われた。

この立場は、入管法・入管特例法・住民基本台帳法などの改正が公布された2009年７月15日当日に開催された２回目の会へと受け継がれた。第２回の特集では、タイトルに越境という言葉を掲げてはいない。だが指紋押捺という問題は、法にとどまらず、文化や身体にもつながる人間の社会的存在のありかたを厳しく問い直すテーマである。具体的な状況の下で、人びとが境界を越えるという行為に対して、また越えざるを得ないという決断に対して、さまざまなレベルで網が投げかけられる事態が生じる。[3]そしてその網をめぐって闘争や交渉や沈黙の諸相が浮き彫りになってくるだろう。そのひとつの、しかし決定的な現れが指紋に他ならない。当日の会では、身体に刻印された押捺の痕跡の歴史性と現在性を再考するとともに、それらを異なる経験のなかで重ね合わせることによって問題の広がりを共有し、突破の方向を探る試みが行われたのであった。[4]

*

こうした問題意識は、境界を意識的に対象化しながら、歴史・社会・文化に関する多面的な論点提示の可能性を追求しようという基本姿勢において、３回目の会にあたる本シンポジウムでも引き続き底流として継承されている。

まず当日におこなわれた各報告の原題を記しておきたい。

１．冨永悠介「宮城菊と鄭用錫はなぜ台湾で出会うことができたのか？――個人史としての東アジア交流史――」
２．鄭卉芸「重層する「外地」における妾――1920-40年代植民地台湾の廃妾論議を中心に」
３．上地美和「クブングゥーとウチナーンチュ――在阪沖縄人の戦後生活史」

これらの報告で意識されていたこと、いわば本論の手前にある問題意識を大切にしながら、各報告が結実した論文の特徴について、私なりの言葉で述べてみよう。

１．一人ひとりは歴史と文化を背負いながら、各々の事情から境界を越えて生活を立てる道を探してゆく。その過程は現実には境界とせめぎ合い渉り合う過程ともなった。抗し難い状況の中で圧迫されたり翻弄される中で、思わぬ形で別の方向へと展開する経験のゆくえは、あらかじめ予定された道筋ではあり得ない。個別の生活史は別の個別の生活史と交じり合い、経験が積み重なっていくが、それはしばしば固有の場において営まれるものである。そしてさまざまな出会いのありかたは、対等な交流を促すものとは限らず、むしろ排外的な方向へ作用するものでもあり、そうした作用を通じて場そのものの意味を重層的に構成してゆく。

宮城菊、鄭用錫という個人の生存のありかたを、台湾北部の港町・基隆の中で「水産」とよばれてきた場と関わらせながら論じること。そしてまた、一方で時代状況が外から制約として作動する形、他方で具体的関係性の場においてその時代状況と交渉していく形、の双方を関連づけながら論じること。関係の形成をみる際には、偶然とよぶしかない契機を深く意識すること。こうしたところに冨永報告の問題意識の基底があるだろう。著者が大切に続けてきた宮城菊の人生との長い対話は、本論文の執筆によってひとつの区切りを得たことにはなるが、彼女の逝去（2013年９月８日）によって途絶えることになったわけではないだろう。宮城菊をめぐるさまざまな経験の重なり合いの意味は、今後にこそ、その深度を改めて問われることになっていくのではないだろうか。調査研究と思索の一層の展開が期待される。

２．植民地併合や戦争の帰結として境界が人為的に変更された場合、その地の住民は移動しなくても越境体験を強いられる。制度や法が帝国の中枢から周縁に向けて発動され、周縁地域における慣習とぶつかり、それが人びとの生活をとらえるのである。つまり外在的に規定された境界が生活内部に侵入し、またそこで生じるズレやきしみが境界を逆に揺さぶることになる。「内地」と「外地」の「峻別」は、支配従属関係をもたらし、前者の優位は揺るぎないようにみえる。だがその自明性は、実は必ずしも絶対的なものではない。

鄭報告は、「妾」という存在に注目し、日常生活の中に、「家」の中に、「内」と「外」の境界線が創出され、隔絶が重層化してゆくありさまを、植民地官僚の言説、メディア、文学作品を執拗に追跡することによって、境界自体の持つ曖昧さと流動性を浮き彫りにしようとする。ここに鄭報告の問題意識がうかがえる。本論で議論を導く重要な素材は、『陳夫人』と題された庄司総一の長編小説である。本書に出てくる立場の異なる幾人もの「陳夫人」の生の中には、帝国内の地域、ジェンダー、階級、人種・エスニシティにより形成された「内」と「外」が複雑に交差していることが粘り強く問われる。こうした観点からの本論文における作品分析は、本書に関する先行研究とは異なる新たな問題領域を照射するものであることを静かに示しているだろう。

３．個人や家族、コミュニティの歴史については、オーラル・ヒストリーの手法との関連を意識しつつ、社会学、文化人類学、歴史学などの人文社会諸科学の各分野において、さまざまな研究蓄積が存在している。その中で、上地論文はいう――「自分が生活のなかで知り得たことを、論文に記載するとき、私は、私自身が私のインタビューのインフォーマントとなり、自分の経験や知ったことを、自分自身が相対化しながら書いているつもりである」と（68ページ）。同論文においては、問題の醸成のしかた、調査の方法、思考の展開、そして記述の文体のすべてが、互いに連動・連携しながら独自の世界を切り開こうとする力に満ちている。自身の立ち位置を含む関係性において聞き書きをするという行為のもつ

意味を深く意識しつつ、幾人かの経験を咀嚼しながら記述された同論文は、上記の研究状況に対して、具体的な一石を投じるものであるだろう。

本土において「沖縄的」であることとその人びとの主要な職業については、沖縄出身者の多い大阪市大正区に即して議論されてはきた。だが両者はいずれも自明のことであるのか、そのように思い込む姿勢そのものに問題がありはしないだろうか――こうした問いは、報告者が自身の生を振り返り、聞き取りを通じ、思考を反芻する中で改めて浮かび上がったものである。たとえば「ダライコ」と呼ばれる鉄くずに注目し、それを定期的に収集することが、さまざまな工夫とつながりを通じて「ずっと続く商い」として鉄くず屋を生業としていく過程を、聞き取りを重ね合わせて析出する。鉄くずと鉄くず屋をキーワードとすることによって、日々のくらしの場とくらしを成り立たせる生業とがいかに関係するのかを、具体的な生活感覚からとらえ直してみようとする立場は終始一貫している。上地論文は行論上、大正区という区画の内部では収まらない人とモノのネットワークに各所で言及せざるを得なくなった。この点からも、生活文化史を論じるゆくえは、さらに広がっている。刮目して次の展開を待ちたい。

最後に、本特集において担当者として心がけたことを簡略に確認して、前言の結びとしよう。

本特集は、先に紹介したように、越境をめぐる諸問題について継続して議論を重ねてきた流れの上に位置するものである。第１回（2002年）では５人の報告者が、第２回（2009年）では４人の報告者と３人のコメンテーターが、そして今回第３回（2013年）では３人の報告者と３人のコメンテーターが、それぞれの論稿を残し、各号の『日本学報』に記録を刻んできたことになる。企画担当者を除き全て異なる18人のメンバーは研究室の内外をまたがっており、この企画を通じて形成したネットワークと議論の継続性は、日本学研究室の研究教育活動のひとつの財産に他ならないと私は考えている。また今回は、冒頭に述べたような事情から、関係者間のやりとりが活発で、その結果として本紀要に掲載されている論稿はいずれも修正を重ね、７月の「日本学方法論の会」に発表した原型を大幅に変更するものにもなっている。

本特集を企画する際に原点として考えたのは、端的に言えば次のような問いの重畳であった――個別の歴史経験が、さまざまな意味での境界とせめぎ合い、渉り合い、転身する過程を注意深く確かめていこう。経験を生きるとはどういうことなのだろうか。一人ひとりの個別の生活史を生きる、時代の経験を生きる、という基本軸を立てながら、他の個別の生活史や時代の経験との出会いかた、そしてつながりのゆくえを、交錯する文化の中で位置づけてみよう――。

こうした問題意識を集約する形で、本特集のテーマを「越境と文化」と定めた。３人の報告者の方法や課題は、もちろん一様ではない。だがこれらの相異なる主題とアプローチに通底するのは、E. W. サイードのいう “overlapping territories, intertwined histories”（重なり合う領土、からまりあう歴史）[5]を具体的場面に即して解きほぐし、丁寧に記述してゆくという姿勢である。平らではないが一つの空間の中で人びとは生き、関係し合う。そして切り分けたり分類することができない状況が重畳していく――といった状況の中から、越境という事態に対して、個性をもった歴史的・社会的・文化的問題提起を試みようとしたのである。最後に、報告者の個人的経験や出会いのもつ初発の意味が、研究・調査・執筆を深める中で、不断に問い直される構造になっているところに、各論文の特徴があることにふれて、本特集の前言にかえたい。

注

１）杉原達「越境考――「越境の中の近現代日本」特集にあたって」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』第22号、2003年、３ページ。

２）同上、６ページ。

３）具体的な史実の紹介と分析に加えて、視座の明確さという点で、指紋なんてみんなで“不”の会編『抗日こそ誇り――訪中報告書――』中国東北地区における指紋実態調査団、1988年、が改めて参照されるべきである。

４）杉原達「いま、指紋押捺を再考する」『日本学報』第29号、2010年。

５）Edward W. Said, *Culture and Imperialism*, New York, 1993. E. W. サイード『文化と帝国主義　１』大橋洋一訳、みすず書房、1998年。

（すぎはら　とおる　大阪大学大学院文学研究科教員）